

# 電線加工の東特巻線

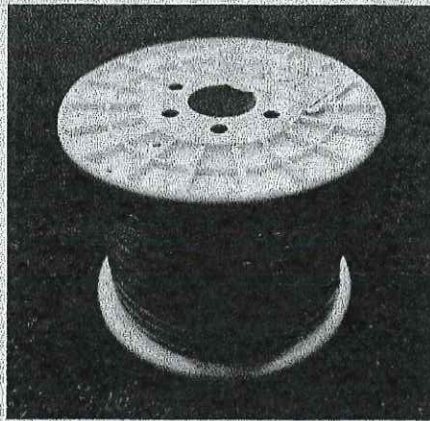
# 四角断面リッツ線拡販

## 充填率向上

電線加工会社の東特巻線(本社＝長野県上田市、本多豊社長)は、四角の形状に圧縮加工したリッツ線「SQLW四角断面リッツ線」の拡販に注力する。電気自動車(EV)をはじめ、ロボットや医療機器、家電、ドローンにおける非接触(ワイヤレス)給電や大電流といった用途を想定。独自技術によるより線における充填率の向上や抵抗値の低減により、従来と同等の性能を維持しながらの製品の小型化や急速充電への適応といったことが可能になるという。既にサンプル出荷を始めている段階とする中、今後は需要に合わせた量産体制の構築も視野に、市場への早期導入につなげたい考えだ。

## EV・ロボ向けなど想定

従来の丸形のリッツ線をなくすとともに、一度の充填率の向上が期線(正方形・長方形)にリ線の充填率を高め、待て、また面接触にすることで無駄な隙間をなくす。これにより2割程、より放熱性の向上の実



製品イメージ

現などにより、より多くの電流を流すことも可能という。技術課の植原啓課長は「需要と

してはEVのほか、工場におけるフォークリフトや無人搬送車(AGV)向けなどの用途

が考えられる」と話す。リッツ線は一旦コイルなどの高周波機器に使用される線材。同社が研究・開発を進めるSQLW四角断面リッツ線は上田市にある本社・工場で製造している。現状は3から7スケアまでをラインアップしており、植原課長は「需要次第ではさらに増やす可能性もある」と指摘する。

生産体制を整える一方で、世間における認知度が低いのが現在の課題になる。植原課長は「展示会で実際に多くのメーカーに見てもらいたい」と意気込む。

東特巻線は1956年に東京特殊電線(現TOKU)からの製造部門の独立とともに、東特巻線工場として発足したのが始まり。現在は電線をはじめ、ハーネス、コイルの製造・販売や電子機器の組み立てといった事業を展開する。線材望に合わせたワンストップで対応・提供できることを強みとしている。